

『リーダーよ、アホであれ』

ホンモノの人間力、一柳氏に学べ

(東洋経済新報社 03・6386・1040)

―執筆の背景は。

「1990年代からの失われた30年で日本経済は停滞し社会的な閉塞感が続いていた。この30年の間に何が失われたのか、そして企業の経営者や官僚はそれにどう対処してきたのか、というのが発端だ。一柳良雄さんは常にリスクをとってチャレンジする。周囲を巻き込む力、行動力にたけている。それは官僚の枠を超えている。そういう姿を描きたいと思った」

―一柳氏との出会いについて教えてください。

「一柳さんとは、彼が通商産業省(現経済産業省)大臣官房広報課長の時に出会った。誰に対してもし分け隔てなく接する人だという印象を持った。ユーモアがあり、非常に勉強家でもある。日本の未来をどうしていくべきかという大きなテーマが常に彼の中にある。人間的な魅力に満ちた人だ。40年近い付き合いだが出会った時の印象は今も変わらない」

―本書を通して最も伝えたいことは。

「リーダーよ、アホであれというタイトルは一柳さんをよく象徴している。官僚には理屈で物事を考えるタイプが多い。アホになれと言っても難しい。だが、一柳さんは現場で人に会うことを大事にする。人間は時には裸になり自分をさらけ出さないとけない。ホンモノの人間力は数値化できるといのが彼の持論だ。10人と会って3人から『また会おう』と言われればホンモノだという」

「通産省に入省して3年目で宮澤喜一元通産相の第2秘書となり、その後田中角栄元通産相の第2秘書を務めた。理の宮澤氏と情の角栄氏という2人の下で仕事をした経験、官僚としての実務を

通じて、論理性と熱き心を持ち合わせる一柳さんの土台が培われた」

―一柳氏は退官以降、ベンチャー支援に情熱を傾けます。

「ベンチャーを支援したいという思いを官僚時代から持つっており、退官後は天下りの道は選ばなかった。ベンチャー人材育成の集大成として2008年に私塾を立ち上げた。それが一流塾だ。一流塾は単に経営理論を教えるありふれた経営塾ではない。リーダーとしての人間力を身に付けることを目指す。参加者は30―50代の起業家や企業の後継者、大企業の経営層だ。一柳さんが尊敬し信頼する政治家や官僚、財界人などが講師を務める」

「講師には失敗した苦い経験や苦労も含めて講義で話してもらった。苦境に陥った時にこそ人間の本性が出る。そこからはい上がった知恵などをホンモノから直接学ぶためだ。講義の後には講師と交えた懇親会を開く。卒業後はOB会である一流塾生会で塾生同士の交流が続いており、業種の垣根を超えた人的ネットワークの構築やビジネスマッチングにつながっている」

―想定する読者層は。

「若い官僚や企業経営者、これからの日本の制度設計に関わる人に読んでもらいたい。政策立案、組織マネジメント、新規事業への課題意識を持つビジネスパーソンがターゲットだ。日本の未来に危機感と希望を持つ若手のリーダー層や、自分のあり方やリーダー像を問い直したいと考えている人に役立つだろう」

(松本理志)

著者
登場

かたやま おさむ
片山 修氏

経済ジャーナリスト

地方紙記者を経てフリージャーナリストとして活動。経済、経営など幅広いテーマを手がける。01年学習院女子大客員教授。著書に『フニの法則』(小学館文庫)、『トヨタの方式』(同)など多数。愛知県出身。

